

### 1. 「独立の父」像に賛否＝首都中心部で建造計画

ネピドー中心部に、「独立の父」として知られるアウン・サン将軍(1915～47年)の銅像を建造する計画が浮上している。将軍の功績を次代に伝える狙いだが、「将軍はすべての国民に好かれているわけではない」と反発する声も上がっている。アウン・サン将軍はスー・チー国家顧問の父で、英国の植民地支配と戦い、独立への道筋をつけた英雄。ミャンマー全土に約200体の像があるものの、2006年の遷都から間がないネピドーの中心部にはまだなく、スー・チー氏の与党・国民民主連盟(NLD)から、首都中心部にないのはおかしいとの意見が出ていた。建造組織委員会のミン・トゥー委員長によると、計画されているのは将軍が軍服を着た乗馬像。高さは最低でも5.5メートルで、アウン・サン将軍像としては最大になるという。年内にデザインを固め、環状交差点の中央に建造する予定だ。総事業費2億チャット(約1600万円)はすべて寄付で賄う。ミン・トゥー委員長は「将軍の命日に当たる来年7月19日までに完成させたい」と意気込む。一方、銅像は不要と批判する人も少なくない。市内に住む商業、ネイ・ソーさん(38)は「少数民族の中には、将軍は(人口の7割近くを占める)ビルマ民族に支配される原因をつくった張本人と考えている人もいる」と指摘。銅像は混乱の元になりかねないと懸念を示した。

### 2. 武装集団が身元確認妨害、職員や協力者脅迫

西部ラカイン州で、イスラム教徒少数民族ロヒンギャへの身分証明書(NVC)発行を担当している職員らが、8月に警察や軍の施設を襲ったロヒンギャ武装集団の中核組織「アラカン・ロヒンギャ救世軍」(ARSA)から殺害の脅迫を受けている。労働・移民・人口省のミン・カイン事務次官が明らかにした。NVC発行は、州内のロヒンギャの身元確認や、隣国バングラデシュで難民となっているロヒンギャを帰還させるためにも必要。ただ手続きを補助している職員や、補助を担うイスラム教徒の村の長老らが、手続きの進展を望まないARSAから脅迫を受けている。事務次官によると、当局の協力者と見なされた村の長老など過去に18人の犠牲者が出ているほか、3人が行方不明。数日前に3人の遺体が発見されたが、行方不明の3人かは不明という。警察が村の長老らの警備に当たっている。ミン・カイン事務次官によると、マウンドー郡区のシュエザー村とブティダウン郡区では厳重な警備の下、NVC発行手続きが行われているが、発行数は州全体で1万1,000部程度にとどまる。ミン・カイン事務次官は「イスラム教徒らはNVC発給を望んでいない。NVCを受け取れば無国籍になるとのARSAの主張を信じているためだ」と明らかにした。「何の証明書も持たない状態のイスラム教徒を、さまざまな手段で説得している」と話した。

### 3. 法王が人権尊重促す、ロヒンギャ問題で

ミャンマー訪問中のローマ法王フランシスコは28日、首都ネピドーで外交団を前に演説し、イスラム教徒少数民族ロヒンギャの問題を念頭に「平和構築と国民和解への困難な道は、正義を貫き人権を尊重しなければ進むことはできない」と述べた。ただ法王は、ミャンマー政府が認めていない「ロヒンギャ」という表現は使わなかった。仏教徒が多数を占める国民感情に配慮したとみられる。法王は「宗教の違いは分裂や不信の原因ではなく、団結や寛容、賢明な国の建設の力にしなければならぬ」とも語り、宗教間の融和の大切さを訴えた。法王は同日、スー・チー国家顧問兼外相とも会談。スー・チー氏も外交団を前に演説し「(外交団ら)友人の支持はこの上なく貴重なものだ」と述べ、ロヒンギャ問題解決への政府の対応に国際社会の理解を求めた。国際社会はノーベル平和賞受賞者でもあるスー・チー氏が問題解決に積極的でないと批判を強めている。法王は27日、ヤンゴンでミン・アウン・フライン国軍総司令官と会談した。軍によると、総司令官は「ミャンマーには宗教による差別はない」と強調。法王は、宗教間の尊重が国の発展につながると述べ、同国の平和のために祈った。

### 4. ロヒンギャ難民、島に移送へ＝送還前の一時的措置－バングラ

バングラデシュ政府は28日、ミャンマー西部ラカイン州から脱出してきたイスラム系少数民族ロヒンギャ難民の一部をベンガル湾の島に移送するための予算を承認した。バングラデシュとミャンマーは23日、難民を帰還させる方針で合意しており、移送は帰還前の一時的措置という位置付けだ。バングラデシュ政府高官はAFP通信に対し「海軍を動員し、約10万人を移送する」と述べた。ただ、島は高潮や雨期の豪雨の影響を受けやすく、居住に適さないとして、支援団体などは計画に反対している。

### 5. 法王、大規模ミサで寛容と慈悲訴え

ミャンマー訪問中のローマ法王フランシスコは29日、ヤンゴンの屋外競技場で大規模ミサを執り行い、「憎しみや拒

絶には、寛容さと慈悲で応えよう」と説き、他人の痛みを知ることが和解と平和につながると強調した。ミサには約20万人が参加した。ミャンマーには他にも宗教や民族を巡る対立があり、法王は「地域社会や国に癒やしと和解の種をまこう」とも呼び掛けた。北部カチン州から参加した少数民族カチンの女性コン・ジャンさん(49)は武装組織と軍との戦闘を逃れて避難民キャンプで暮らしているといい、「平和のため、みんなが考え方を考える必要がある」と語った。ミャンマーは人口の9割弱が仏教徒。キリスト教徒は約6%で、少数民族地域に多い。法王はミャンマー仏教界の最高管理組織の僧侶らとも面会。「平和と人権の尊重、公正さを貫くことを確認する機会になる」と発言し、僧侶側のトップは「過激思想やテロ行為が宗教の名の下で広がっているのは悲しいことだ」と述べ、それぞれが平和の大切さを訴えた。

## 6. 外国人訪問が急減速、ロヒンギャ衝突で

ミャンマー旅行者協会(UMTA)によると、ミャンマーを訪れる外国人旅行者に急ブレーキがかかっている。西部ラカイン州のイスラム教徒少数民族ロヒンギャ問題で、キャンセルが相次いでいるためだ。協会のテト・ルウィン・トー会長は、ラカイン州の古都マウーや、リゾート地ガバリで多くの旅行予約が取り消されていると話した。州北部でのロヒンギャ武装勢力と治安当局との衝突が、正確な情報が伝わらず州全体に響いている。一方、ヤンゴンや中部の遺跡都市バガン、マンダレーの旅行取りやめは多くないとし、年末に向けての観光シーズンに期待を示した。ミャンマー観光ガイド協会(MTGA)のアウン・トゥン・リン会長によると、キャンセルが多いのは米国と英国からの予約。アジア各国や、欧州でもイタリアやフランスからは定期的に旅行者が訪れているという。国籍別の訪問客で最も多いのはタイで、中国、日本、韓国、シンガポールと続く。

## 7. ラカイン州の橋5本、来年3月完成へ

ミャンマー建設省橋梁(きょうりょう)局によると、西部ラカイン州で建設中のサイディン橋が、来年3月に完成する見通しになった。州内では他に4本の橋も建設中で、来年3月までの2017年度内に工事を終えたいとしている。橋梁局の職員によると、サイディン橋は16年12月に着工、全長600フィート(約183メートル)、幅24フィートの対面交通。建設費は27億3,000万チャット(約2億2,000万円)。ヤテダウン、タウン、ガサンポー、イェワハウンの4本の橋についても、3月までの完成を目指す。5月ごろから雨期入りするため、その前に終えたい考え。州内では、州都シットウェ近くのボンナギンからヤテダウンを経由し、州北部ブティダウンに至る道路を整備中。橋梁局のミン・ナイン・ウー副局長は「完成すれば地域の発展に重要な役割を果たす」と話した。ラカイン州は国内で最も開発の遅れた地域。経済発展が治安情勢の改善にも役立つとして、政府はインフラ整備を急いでいる。

## 8. 日本、ユニセフ通じラカインの学校再建支援

日本政府と国連児童基金(ユニセフ)がミャンマー西部ラカイン州で再建していた学校が完成し、28日に引き渡し式が行われた。州内の78校を再建する取り組みの一環で、現在も約30校が工事中だ。ミャンマー教育省に引き渡されたのは、州北東部ミンビャ郡区の中学校。式典には樋口建史日本大使、ユニセフ・ミャンマー事務所のポール・エドワーズ副代表、州のチャン・ター社会問題相らが出席し、生徒約550人が参加した。樋口大使は「新たな校舎は、日本国民からミャンマーの未来を担う子どもたちへの贈り物」と話した。日本政府とユニセフは共同で、2015年にラカイン州と中部のエヤワディ、バゴー、マグウェーの3管区、北西部のザガイン管区とチン州を襲った大洪水で破壊された493校、うちラカイン州は78校を再建する事業に取り組んでいる。ユニセフの技術者が地場建設会社と協力し、男女別のトイレや障害を持つ生徒が使いやすい手洗い場などユニセフが定めた基準を満たす安全な校舎の建設を進めている。日本は、ラカイン州の全ての子どもに平等な教育を受ける機会を与えようというユニセフの取り組みに対し、1,000万米ドル(約11億円)の無償資金協力を実施している。同州は経済発展が遅れ、洪水やサイクロン、地震など自然災害の影響を受けやすく、民族対立も続く。子どもの3割は初等教育を受けていない。

## 9. ラカイン民族政党ANP、内紛で党首辞任

ミャンマー西部ラカイン州を拠点とする仏教徒アラカン族の民族政党アラカン民族党(ANP)のエー・マウン党首は11月27日、党の中央執行委員会に辞表を提出、28日に辞任が認められた。党内の確執が背景とされる。ANPは28日、辞任を正式に認めた。エー・マウン氏は辞表の中で、党員の一部が同氏の足を引っ張る行動をとっていると批判。今年4月に行われたラカイン州議会の副議長補欠選挙を巡っては、党執行部の一部が、ANP議員2人を候補に擁立し、党内の亀裂を引き起こしたと非難した。エー・マウン氏は「これら全てに関し、党首が責任を負わなければならない」とし、辞任する意志を固めたと説明した。党執行部の一人によると、エー・マウン氏は10月開催された執行部の会合で今後の身の振り方に不安を示唆、辞任は予期されていたという。党内では、同氏が新党を設立するとうわさも出ているという。

## 10. カチン独立軍と国軍、11月上旬から戦闘頻発

ミャンマー北部カチン州の少数民族武装組織カチン独立軍(KIA)によると、11月上旬以降、州内のタナイ郡区で国軍との戦闘が頻発している。KIAは、ミャンマー政府との停戦協定(NCA)に未署名の有力な少数民族武装勢力。KIAのナウ・ブー大佐によると、国軍はタナイ郡区の半径16キロ圏にある14地域を攻撃。戦闘は毎日ではないものの頻発に発生し、早朝から午後まで続いた。29日現在、犠牲者は報告されていない。タナイ郡区のキリスト教司祭ナウ・タウン氏によると、ンガガとナムビューの2村の一部住民は教会や郡区内の親類宅に避難している。帰還のめどは立っていない。ナウ・ブー大佐は6月に起きた国軍との戦闘を念頭に「軍の掃討作戦の続きかもしれない」と指摘した。和平交渉に関しては「(KIAが加盟する)北部の7武装勢力で組織する『政治対話委員会』(FPNCC)の原則に従う」と述べた。FPNCCは5月、政府とのNCAに署名はしないが、和平プロセスには参加する意向を示したが、国軍側は加盟する一部組織との和平交渉に消極的とされる。現場は琥珀(こはく)の産地だという。

## 11. 習氏「経済回廊」建設意欲、スー・チー氏会談

中国の習近平国家主席は1日、スー・チー国家顧問兼外相と北京で会談し、両国を結ぶ「経済回廊」建設に意欲を示した。習氏は「両国関係は健全で安定的に発展している」と評価。互いに国民の幸福を実現するため、関係を発展させたいと表明した。スー・チー氏は、習氏が両国関係を重視していることへ謝意を示した上で、国政運営の経験を巡り中国側との交流を深めたいと述べた。中国はミャンマー西部ラカイン州のイスラム教徒少数民族ロヒンギャへの迫害問題で「停戦の実現」など3段階からなる解決策を提案しているが、会談で話題に上ったかは不明。スー・チー氏は中国共産党主催の国際会議に出席するため訪中した。習氏は1日、カンボジアのフン・セン首相とも会談した。

## 12. イスラエル、国軍への武器販売凍結を明言

イスラエル外務省は11月30日、数カ月前にミャンマーへの武器販売を凍結したと発表した。駐イスラエル・ミャンマー大使が、現在もイスラエルから武器を購入していると発言したことを受けたもの。大使は数時間後に発言を撤回、謝罪した。マウン・マウン・リン大使は11月30日、イスラエルの国軍ラジオとのインタビューで「イスラエルは現在もミャンマーに武器を販売している」と発言した。この発言を受けてイスラエル外務省は同日、「イスラエルは数カ月前にミャンマーへの武器販売を完全に中止した」との声明を発表した。マウン・マウン・リン大使は先の発言を撤回、謝罪した。だが声明では、監視装置の輸出や軍事訓練の提供については言及がなかった。ミャンマー国軍向けの武器輸出の中止を訴えているイスラエルの人権派弁護士は「外務省はなぜ単純に、防衛関連の全ての輸出を凍結したと言えないのか」と指摘した。10月には、イスラエルが今年4月までに最新型哨戒艇「スーパー・ドボラMK3」2隻をミャンマーに納入していたことが明らかになったが、イスラエルは公には認めていない。

## 13. 「ロヒンギャ」明言、解決求める＝バングラ訪問のローマ法王

バングラデシュ訪問中のフランシスコ・ローマ法王は1日、迫害を受け隣国ミャンマーの西部ラカイン州から脱出してきたイスラム系少数民族ロヒンギャ難民のグループとダッカで面会した。先のミャンマー訪問時には使わなかった「ロヒンギャ」という言葉を用い、難民に寄り添う姿勢を強調。問題の早期解決を国際社会に求めた。法王は、ミャンマー国境に近いバングラデシュ南東部ロックスバザールからダッカに来た16人のロヒンギャ難民と面会。一人ひとりの手を握りながら、ラカイン州を脱出したいきさつに耳を傾けた。面会后、法王は「ロヒンギャ」と明言。「あなたたちを迫害し、傷つけた人たちに代わり、許しを求めたい」と述べた。また、集まったバングラデシュの各宗派の指導者らに向け、少数派の迫害や難民問題に目を閉ざそうという誘惑と闘うことが大切だと強調。そのために「寛容さや協力」が必要だと呼び掛けた。

## 14. ミャンマー大司教の忠告に従う＝「ロヒンギャ」発言封じた法王

フランシスコ・ローマ法王は2日、ミャンマー訪問中「ロヒンギャ」という言葉を使わなかった理由について、ヤンゴンの大司教からの忠告に従ったと明らかにした。バングラデシュ訪問を終えローマへ向かう機中で記者団に語った。ミャンマー政府の見解では「イスラム系少数民族ロヒンギャ」という民族は存在しない。「バングラデシュからの不法移民」がいるだけだ。法王が「ロヒンギャ」と発言すれば、ミャンマーの過激派を刺激し、キリスト教徒が襲われる恐れがあると忠告を受けた。法王は「公式の発言でもし私とその言葉を使えば(開きかけた)ドアをバタンと自分で閉めてしまうことになったはずだ」と述べ、配慮があったことを認めた。一方で「私の考えは既に誰もが知っている」とも釈明した。ミャンマーに続いて訪問したバングラデシュの首都ダッカで、法王はロヒンギャ難民と対面した。「ロヒンギャ難民との面会実現は今回の歴訪の条件の一つだったが、どこでどう会えるかは最後まで分からなかった」と法王は語った。難民の苦難を聞き「私は泣いたし、難民たちも泣いていた」と振り返った。短期間のうちに殺到した60万人を超える難民を受け入れているバングラデシュ政府の努力に対し「途方もないことをやっている」と最大の賛辞を贈った。

## 15. 法王の存在知らない、ロヒンギャの関心薄く

ローマ法王フランシスコは11月下旬からイスラム教徒少数民族ロヒンギャを巡る対立で揺れるミャンマー、バングラデシュを訪問中だ。しかしバングラデシュの難民キャンプにいるロヒンギャの人々には法王の存在自体知らない人も多い。難民60万人以上が押し寄せたバングラデシュ南東部コックスバザール近郊のキャンプ。電気はなく、テレビも見当たらない。難民の多くはミャンマーで自給自足の暮らしをしてきた農民たちだ。小学校を中退した農業ムハンマド・イドリスさん(28)は「法王という言葉は初めて聞いた。(重要な人であっても)私たちにミャンマー国籍を与えてくれなければ、苦しい状況は変わらない」と話す。ミャンマー政府はロヒンギャを自国民と認めておらず、教育を十分に受けていない人が多いようだ。西部ラカイン州の自宅を軍に焼かれたという主婦ディル・ジョルルさん(23)は、4歳と2歳の子供と一緒に逃れてきた。「ローマ法王とは何をしている人？私は故郷に戻りたいだけ」とつぶやく。同州の主要都市マウンドーで暮らしていた携帯電話販売員ヌール・モハンマドさん(34)は法王訪問をニュースで耳にしたといい「キリスト教徒には法王や欧米世界という守護者がいてうらやましい。われわれイスラム教徒は誰も守ってくれない」と訴えた。

## 16. ロヒンギャ問題改善を支援＝安倍首相

安倍晋三首相は1日、ミャンマーのウィン・ミン下院議長と首相官邸で会談した。同国のイスラム系少数民族ロヒンギャ問題について、首相は「状況改善のための努力を最大限後押しする用意がある」と述べ、既に表明した1250億円の支援などを着実に進める考えを示した。これに対し、同議長は日本の支援に謝意を示し、「友好・協力関係をさらに発展させたい」と語った。北朝鮮による大陸間弾道ミサイル(ICBM)発射を受け、首相は国連安保理で採択された制裁決議の完全履行を呼び掛けた。同議長は「決議順守に協力する」と応じた。

## 17. タイ出稼ぎ手数料融資へ、斡旋業協会と銀行

ミャンマー海外雇用斡旋業者協会(MOEAF)は国内の銀行と提携し、タイ出稼ぎ労働者に対する労働許可申請費用の融資を計画していると明らかにした。労働者が認定仲介業者への手数料以外に、不透明な手数料などを支払わなくて済む仕組みを整える狙い。MOEAFのチョー・ティン・チョー事務局長が11月27日、タイと覚書(MOU)を交わす方針だと明らかにした。今後選定する認定仲介業者を通じて融資するといい、「業者が、労働者への融資の保証と説明責任を負う」と強調した。仲介業者は、タイで労働契約が成立しMOEAFの認可を受けた後、労働者に代わって銀行から融資資金を受け取る。MOEAFが銀行と必要書類について協議中で、金利も検討中とした。ミャンマー労働・移民・人口省によると、旅券(パスポート)取得と国境越え、健康診断に必要な費用は15万チャット(約1万2,400円)。タイ側でも費用は3,100バーツ(約1万円)という。ただ関係者によると、複数の業者が中間手数料を上乗せしているのが現状で、労働者の負担額は総額50万～70チャットに跳ね上がる。省の推計では、タイが不法就労の取り締まりを強化してから、出稼ぎ労働者7万人が帰国した。一方、ミャンマーからタイに毎月1万人が出稼ぎに出ている。

## 18. 最近の外資の進出状況

### ・トヨタ、交通安全運動開始 赤十字などと提携、事故多発受け

トヨタ自動車は27日、ミャンマーで交通安全の啓発活動を始めると発表した。世界道路交通安全パートナーシップ(GRSP、本部スイス)、ミャンマー赤十字社(MRCS)と同日に覚書を締結。ミャンマーは2011年の民政移管後、ヤンゴンを中心に交通量が急増、事故も多発、交通安全対策が急務となっており、事故防止を後押しする。

### ・鉄建建設、ティラワ周辺道でマックスと契約

中堅ゼネコンの鉄建建設は27日夜、ミャンマー財閥系の建設会社マックス・ミャンマー・コンストラクションと、ヤンゴン市街と郊外のティラワ経済特区(SEZ)を結ぶ幹線道路改修工事のサブコン(下請け)契約を結んだ。ティラワ特区と市内をつなぐタンリン大橋付近から南側8.7キロの片側2車線の幹線道路を、片側4車線に拡幅する。ミャンマー国鉄(MR)のティラワ線の橋の架け替え、信号や電線、排水溝の整備も行う。

### ・ネスレが工場、販売品の半分を国産化へ

スイス系食品大手ネスレ・ミャンマーのハイリ・デブリム・コバック社長は、ヤンゴン東部ダゴン・セイッカン郡区の工場の稼働で、国内販売品の半分を現地生産に切り替える計画を明らかにした。

### ・ヤンゴンの複合施設ヨマ、大成が建設受注

ヤンゴン中心部の再開発に伴う大規模複合施設「ヨマ・セントラル」の開発事業で、ミャンマー大手財閥サージ・パン・アンド・アソシエーツ・ミャンマー(SPA)傘下のヨマ・ストラテジック・ホールディングは29日、大成建設とフランスの建設大手ブイグの2社と建設請負工事契約を結んだと発表した。発注額は計4億米ドル(約446億円)超。

以上